『焦げついた影』における過剰なナショナリズムとトランスナショナルな絆

Excess nationalism and transnational comradeship in Kamila Shamsie's *Burnt Shadows*

平林美都子

Mitoko HIRABAYASHI

Abstract

Kamila Shamsie is a Pakistani writer who has written seven novels in English to date. Her fifth novel, *Burnt Shadows,* deals with the story of a Japanese woman, Hiroko Tanaka, over nearly sixty years from the day of the atomic bombing in Nagasaki to the immediate post-9/11. The story follows Hiroko's life journey from Nagasaki to Delhi, Karachi, and New York. At each place she happens to experience serious national incidents: the atomic bomb, the Partition of India, a resistance movement after the Soviet invasion of Afghanistan, and the war against terror. Throughout, Hiroko criticizes both the official policies that consider casualties in an enemy country or even in one's own country expendable for national security, as well as the popular acceptance of such nationalism. In her novel, Shamsie suggests that the protagonist's transnational comradeships challenge such exclusive nationalism.

キーワード

Kamila Shamsie, *Burnt Shadows*, ナショナリズム、長崎原爆、ビッグ・ピクチャー

ナショナリズムの過剰さ

パキスタン女性作家のカミラ・シャムシーの五番目の作品『焦げついた影』（Kamila Shamsie, *Burnt Shadows*, 2009）は 10 行の短いプロローグから始まる。独房に入れられた一人の男（Raza）は衣類をすべて脱ぐように命じられ、裸のまま放置される。次に身につけるものが「オレンジ色のつなぎ服」の囚人服であることを察知した彼が、「どうしてこのようになってしまったのか」と考えるところで、プロローグは終わる。続く四部構成の物語本体で、プロローグにおけるラザの自問が明らかにされていく。

まず物語の概要を説明しておこう。第一部は 1945 年 8 月 9 日の長崎が舞台である。ドイツ語

教師のヒロコ・タナカとドイツ人婚約者のコンラート・ヴァイス（Konrad Weiss）は被爆。ヒロコは着物の絵柄の鶴が背中に残る大やけどを負い、コンラートの身体は跡形もなくなってしまう。第二部は 1947 年のインド・パキスタン独立・分離が歴史的背景となっている。ヒロコは被爆者に対する偏見から逃れるため、コンラートの異母姉イルゼ（Ilse、イギリス名 Elizabeth）とジェームズ・バートン（James Burton）夫妻が住むデリーを訪れた。当時彼らの息子ヘンリー（Henry、その後 Harry）はイギリス寄宿学校へ通っていた。ヒロコは弁護士ジェームズの元で働くイスラム系インド人サジャッド・アリ・アシュラフ（Sajjad Ali Ashraf）からウルドゥ語を習い、まもなく二人は結婚する。印パ分離後、ヒロコたちはパキスタンのカラチに住むことになり、バートン家族はイギリスへ帰国した。第三部はそれから 35 年後、舞台はソ連のアフガニスタン侵攻後のカラチへと移る。ヒロコとサジャッドの息子ラザは高校卒業試験に失敗し、偶然アフガンの少年アブドゥラー（Abdullah）と知り合う。そして彼を通じてイスラム戦士（ムジャヒディン）と接触することになった。CIA で働くハリーと再会したサジャッドは、内通者だと疑われ何者かに殺される。第四部は 9/11 同時多発テロ後のニューヨークとアフガニスタンが舞台となる。アメリカに不法滞在しているアブドゥラーが祖国へ戻れるように、アフガニスタンにいるラザとニューヨーク在住のヒロコはそれぞれ画策する。一方で、ハリー殺害関与の疑いがかかったラザはアフガニスタンから逃げ出し、カナダで落ち合ったアブドゥラーの逃亡を助けた後、自分は身代わりとなって捕まってしまう。

プロローグを読み終わった読者は、「オレンジ色のつなぎ服」からこの場所が米国のグアンタナモ収容所であることに気づくだろう。19 世紀にキューバとの間で租借条約が締結されて以来、グアンタナモは米国の管轄下に置かれていた。そして 2001 年の 9/11 テロ後、対テロ戦争に突入したブッシュ政権は、テロ容疑者の拘留地としてグアンタナモ米軍基地を選んだのである。この収容所は米国から地理的に離れているためか、本国の管轄下にありながらも米国の法律が厳密に適用されないグレー地帯だと言われる。収容所で非合法の拷問や非人道的拘禁がまかり通っていたことが世間に明らかになるのは後のことになるが[1]、9/11 同時多発テロの映像がいまだ記憶に生々しい 2002 年初頭、ラザが経験する拷問がいかに人間の尊厳を無視したものなのかは想像に難くない。国の防衛という大義のため、敵国民の生命・生活の犠牲はやむを得ないものとされがちである。さらに言えば、国を守ることが優先されてしまい、自国民ですら犠牲もやむなしとする過剰なナショナリズムも是認されてしまう。シャムシーの『焦げついた影』は、個人の生命や生活の犠牲が「国家の安全のために必要」（Vitolo 6）であり、「必要性というアメリカ公式の言説」（O’Loughlin 99）として受け入れられてしまう過剰なナショナリズムを批判していく。

本作品ではアシュラフ（タナカ）とバートン（ヴァイス）の二家族八人（コンラート・ヴァイス／ヒロコ・タナカ・アシュラフ／サジャッド・アシュラフ／ラザ・コンラート・アシュラフ／イルゼ・バートン／ジェームズ・バートン／ハリー・バートン／キム・バートン）が主な登場人物である。国家間の政治的関係性は人々の人生に直接的、間接的な影響を与えていく。

ダニエラ・ヴィトロは『焦げついた影』においてさまざまな政治的出来事という「エージェント（仲介的手段）」が登場人物の「アイデンティティ形成」に影響を与えていると指摘する（Vitolo 1）。確かに、国家間の政治的出来事・事件は過剰なナショナリズムを要請し、その結果、個人の生活の継続性や関係性は分断、断続させられてしまう。そしてアドリアナ・キーツコウスキが論じるように、グローバルな事象とローカルな影響との複雑な絡み合いは、以下に見ていくような登場人物の故郷の喪失につながっていくのである（Kiczkouski 132）。

コンラートの場合、長崎にやってきたのは1938年、ドイツでナチスの全体主義体制が強化され優生政策が進められていく時期だった[2]。母国から離れたい彼だったが、インドに住む「イギリス人」の異母姉夫婦は「ドイツ人」の彼を受け入れることを拒み、代わりにジェームズの叔父が所有していた長崎の家を提供したのだった。日本人のヒロコは原爆後インドに渡り、サジャッドと結婚したが、印パ分離後にインドに戻ることができず、二人は「パキスタン人」として生きることになった。さらにインドとパキスタンの核実験後、未亡人になっていたヒロコはニューヨークのイルゼの元に移り住むことになる。日本人の母とインド人の父の間に生まれたラザは、パキスタン国籍ではあるが、ソ連のアフガニスタン侵攻後の紛争時、語学堪能さと彼の容貌によってモンゴル系民族ハザラ族[3]として通ってしまう。またイギリス人の母とドイツ人の父を持つイルゼは、ジェームズと結婚してイギリス国籍を持つことになった。戦時中彼女は、敵国ドイツとの関係を否定してきたが、ベルリンが爆撃されたときには、自分自身が「完全なドイツ人であることを感じずにはいられない」と思った（101）。インド生まれのヘンリーはといえば、イギリスの寄宿学校では「アングロ・インディアン」として劣等感を味わい、生まれたインドに帰りたいと思っていた。そして 11 歳でアメリカへ移ったときには「アメリカ人」に同化することを決めた（174）[4]。しかしその後の彼の人生の大半は、ウルドゥ語が話される土地に身を置くことになるのである。

一体、国家的事件によって個人の人生はただ翻弄されるままなのであろうか。答えはノーである。彼らは日常生活のパフォーマンスの中で抵抗しながら他者との関係を紡いでいくのだ。本稿ではとくにパフォーマンスとして衣服の着脱、さらに作品のタイトルになっている「焦げついた影」に着目し、それらが登場人物の思考やアイデンティティ、あるいは互いの関係性をどのように表象しているのかを見ていきたい。その上で二つの家族の間で継承されていく「クモの巣」の逸話が、過剰なナショナリズムに対する抵抗としてどのように機能していくのかを考察したい。

管理・支配に抵抗する衣装

『焦げついた影』の舞台は日本→インド→パキスタン→アフガニスタン→アメリカ→カナダと、東アジアから南アジアを経て北アメリカへと移動する。各土地における地理的、歴史的、文化的状況に適合する衣装は当然のことながら様々である。

戦時中の日本であらゆるものが「実用的」（6-7）になっていく様子をヒロコは批判的な目で眺めている。花壇は芋畑へ、学校は工場へと変わり、男子学生も人間としてよりも武器として一層実用的だとされたのである。当時のヒロコが着ていた服は白いシャツと灰色のモンペである。贅沢が許されない戦時下では、地味な色の動きやすいモンペが非常時服として定着していた。モンペという実用的な国民服によって女性は平準化され、軍需工場で働く国家のための実用的要員となったのである。しかしコンラートから求婚されて初めてキスを交わしたヒロコは、彼が去った直後、性的な興奮からモンペ服を脱ぎ捨て、三羽の鶴の絵柄が付いた亡き母の着物を身にまとった。モンペという国民服の強制的着用が戦時中に要請された国家への忠誠心を示していたのだとすれば、モンペ服から着物への衣装替えは、国家の管理や支配を拒絶して個人の欲望を発作的に表現した行動だと言えるだろう。

その後のヒロコのグローバルな移動が意味しているのは、彼女がどの国にも所属していない、正確に言えば、所属することを求めてはいないということである。カラチのムスリム風土に生まれ育ったラザが 13 歳のとき、「足を見せている」母のワンピース姿を恥ずかしいと訴えたときのことである（132）。ヒロコは息子の要望通り「ムスリム」らしくなるため、サルワール・カミーズ（女性のイスラム教徒用の長い丈のシャツとパンツ）を着た。数ヶ月後、上衣のカミーズがぴったりしすぎるとラザが言い出し、結局彼女は元通りの服に戻った。ムスリムの服着用というエピソードは異文化の風習に対するヒロコの適応力というより、むしろそれが息子を宥めるためだけの行為だったということを示している。つまり、彼女にとって特定の文化へ所属することは何ら意味を持たないのである。

衣装に反抗心を帯びさせているのはハリーの娘キム（Kim）である。アメリカ生まれの 15 歳のキムは何事にも苛立つ年頃だった。パキスタンの父の元を訪れた彼女は、後頭部の一房だけを長くした短髪、黒い口紅にスタッズ付きレザー・ジャケットという反抗心を全身で表現するようなアメリカの若者のパンクロック風の出で立ちだった。ところが建築に関心がある彼女は、建設中のモスクを訪れたときすぐさま口紅を落とし、ジャケットを脱いだ。キムの着脱の行為には、体制に反抗する素振りを示しつつ、異国の風習を尊重するという若者特有の柔軟性を見て取ることができるだろう。

衣装はまた地位や身分の代理としても機能する。その一例がジェームズからサジャッドへ譲られたカシミアのジャケットである。ロンドンのサヴィル・ロウで作らせたジャケットは、宗主国イギリス人の人種的優位性を表している。サジャッドがこのジャケットを身に着けることは、ホミ・バーバの言うところのイギリス人を模倣する擬態（ミミクリ）の行為にもみえる[5]。しかし、彼が植民者の権威に追従しながら、それを模倣することで権威の絶対性を揺るがしているのかどうかは曖昧である。弁護士になることを夢見るサジャッドの場合、むしろこのジャケットは弁護士というインド社会における階級的優位性を象徴しているといえるだろう。結局弁護士になれなかった彼は、その夢を息子に託した。ラザが高校の最終試験を受ける日、サジャッドがそ

のカシミアのジャケットを息子に譲ったことは重要である。ジャケットの譲渡は、大学で司法を学んで弁護士になるという父の夢・願望の譲渡であるからだ。しかしながら、ラザは父の夢に応えられず、その後作品中に彼がジャケットを着用する場面はない[6]。このジャケットを次に身に着けるのはキムである。作品の後半、亡き父のアパートの整理をした彼女はラザのアパートの鍵を見つけ、無断でそこに入り、クローゼットの中のカシミアのジャケットをふと羽織ってみる。このジャケットが祖父ジェームズから転々と受け継がれていったことをキムは知る由もないが、彼女の行動はバートン家とアシュラフ家の密接な繋がりを象徴している。さらにはラザに対するキムの個人的な親近感をも表している。とはいえ、それが衣服着用という代理による接触であることから、二人の関係の距離感も暗示されているだろう。

持ち主の代理として機能する服の好例がハリーのボマー（ボンバー）・ジャケット[7]である。ラザはハリーとともにアフガニスタンの民間警備会社で通訳として働いていた。そこは民間とはいえ CIA と繋がっている会社だった。ラザは旧友アブドゥラーを逃亡させる手助けをニューヨーク在住のキムに頼み、断られた。ハリーに援助を頼もうと考えていた矢先、当のハリーがタリバーン一派に殺害される事件が起きたのである。ラザは容貌や語学力、少年時代にムジャヒディンと接触した過去があることから犯人一味だと疑われ、滞在地から離れることができなくなり、やむを得ず逃亡を決意する。実はハリーはこうした非常事態を予期していたのかのように、ベッドの下に地下トンネルの入り口が隠されている部屋をラザと共用していた。数週間前に二人は実際にその地下道を通り、トンネルの出口に車が準備されていることも確認していたのである。ハリーがお膳立てをした逃走ルートを辿ることになったラザは、ハリーのボマー・ジャケットも持ち出し、カナダで再会したアブドゥラーに渡した。ジャケットで変装したアブドゥラーが警察から逃げおおせたことを考えると、ハリーはラザの逃亡を助けただけでなく、「ジャケット」という形でラザの旧友も助けてくれたのである。援助者のはずだったキムは警察に密告してアブドゥラーの逃亡を阻止しようとしたが、彼女の父のジャケットがラザを介してアブドゥラーに渡り、逃亡の手助けをしたというのは皮肉なことである。この件については「クモの巣」に関連して再度考察したい。

焦げた影の表象

本書のタイトル「焦げついた影」が意味するものは、もちろん、原爆の熱線によってヒロコの背中に焼き付いた三羽の鶴の影である。焼印はそれを刻印する側の圧倒的な支配力を意味する。焼印を押された家畜同様、ナチスによる被収容者は所有者に対して全く無力である。着脱可能な衣服と違い、身体の焼印という影は過去の無力な体験が消えないことを示している。原爆の痕跡は身体に刻まれた目に見える焼印だけではない。「被爆者」という見えないレッテルも焦げついた影同様、消すことができないのである。彼らは生存してしまったという負い目に加えて放射能被曝の不安も持ち続けていた。「被爆者」というレッテルは偏見や差別を産み出し、被害国日本を分裂させ内部に他者（よそ者）を作り上げていくのである

『焦げついた影』にはもう一つの「影」がある。これは原爆の熱線によってできた石の表面の人影である。ヒロコはある石の人影をコンラートだと推測し、コンラートの友人ヨシと共にその石を国際墓地まで転がして埋葬した（78）。コンラートへの性的感情に目覚めたヒロコが着物を羽織ったことによって、三羽の鶴の影が身体に焼き付いた。それを思い起こせば、鶴の影はコンラートの人影と深く結びついているといえるだろう。

コンラートは作品の第一部に登場するだけではあるが、ラザのミドルネームにも使用され、バートン/ヴァイス家とアシュラフ/タナカ家を結ぶ絆の役割を果たしている。「長崎のヨーロッパ人と日本人の生活を見つけることに取りつかれ[…]人々が互いに近づき、親しくなっていくパターンを見ていた」（69）コンラートは、優生思想を基にしたナチス・ドイツのような軍事国家とはできるだけ切り離された世界の存在を信じていたと、ヒロコは語る。そして、自分のドイツ的な面と異母姉のイギリス的な面が全く障害とならずにイルゼと会うことができる世界を彼は長崎で探し続けていた、とヒロコは説明した（70）。コンラートはナショナリズムが一つの家族を分断していることを憂い、それを脱した世界を信じたかったのである。影は一方で破壊と分断を象徴し、他方で人々の繋がりの復活を志向するのである。

クモの巣と「ビッグ・ピクチャー」

9/11 の同時多発テロから三か月後を描く第四部では、アメリカのニューヨークとアフガニスタンと二つの舞台が交互に入れ替わり、物語全体の山場へと向かっていく。陸路・海路・空路（アフガニスタン→イラン→オマーン→カナダ）を使って過酷な逃亡体験をしたにも関わらず、ラザはカナダでアブドゥラーと再会後、旧友の身代わりとなって逮捕されてしまうのである。彼の逮捕場面（41 章）とキムがヒロコと対峙し合う最終章（42 章）は、本作品中、最も息詰まるクライマックス・シーンとなっている。

アブドゥラーの国外逃亡の援助をして欲しいというラザの依頼を断ったキムだったが、ヒロコがレンタカーを借りて自ら逃亡の手助けを考えていることを知り、やむなくキム自身がその役を引き受けることになった。パキスタンのパスポートを持つヒロコより、ビザなし特権を持つアメリカ人のキムの方が、カナダへの国境超えはずっと容易いからだ。ここで注目すべき点は、「怪しいアフガン」だとして FBI に追われているアブドゥラーに対するヒロコとキムの対応の違いである。故郷カンダハールが戦争によって荒廃してしまい喪失感を覚えていたアブドゥラーにヒロコは共感し、故郷へ帰るための逃亡援助を申し出た。他方、タリバーンに父を殺されたばかりのキムはカナダまで彼を連れて行くものの、聖戦（ジハード）で死ねば殉教者になるという話を聞くや激怒し、よそ者に対する嫌悪感から警察に通報してしまう。「怪しいアフガン」への対応の違いは、「クモの巣」とその影の選択に繋がっていく。

ラザは逃亡の途中、何度か「クモの巣」の逸話を思い出している。『焦げついた影』において最初に「クモの巣」の話が登場するのは、クモを殺そうとしたイルゼをヒロコが諌めるシーン

である。クモがなぜイスラム教徒に大事にされているのかという理由は、モハメッドと友人がメッカから逃げ出したとき、隠れた洞窟の入り口にクモがすばやく巣を張り巡らせたため、追っ手は人の気配がないと判断して立ち去った、という逸話に因る（110）。クモの逸話はまずサジャッドからコンラートへ伝えられ、続いてコンラートからヒロコへと伝わった。その後、この話はイルゼからハリーへそしてラザへと、アシュラフ=タナカ家とバートン=ヴァイス家の間で継承されていき、逸話に見られるように両家は助け合ってきた。例えば、コンラートはサジャッドにバートン家での仕事を紹介し、ヒロコは戦時下の日本で異国人コンラートに友情を示し、イルゼはヒロコにデリー、ニューヨークで住まいを提供し、結婚祝いのイルゼの宝石はヒロコたちのカラチの家を購入する資金となった。またヒロコの独立心はイルゼの離婚の後押しをすることになり、ハリーはラザを現在の仕事に誘ってくれた。「我々は互いのクモだよ」（356）というハリーの言葉にあるように、「クモの巣」は互助精神の逸話であり、半世紀にわたって両家を結び付けていた「情緒的絆」または「情緒的セーフティ・ネット」（Kiczkowski 129, 133）となっていたのである。

キムにはまだこの逸話が伝えられていなかったが、ラザは「自分の身に何か起きたときには高齢の母を[キムが]見守ってくれることを信じ」（356）、彼女を絆の一部だと思っていた。彼はアブドゥラーを逃がすため自分が警察に捕まったときには、それがキムの裏切りによるものだと気がついても、「クモがいればクモの影もある」と自らを納得させた（362）。すなわち、クモが巣を張って危機を救ってくれる場合もあれば、クモの影だけでは救えない不運が降りかかることもあると考えたのだ。原爆、故郷喪失、波止場でのサジャッドの射殺、防弾服を着なかったためのハリーの死など、アシュラフ家とバートン家の不幸な経験がそうである。ラザは自分がクモの影の物語になってしまったことを感じつつ、アブドゥラーの逃亡に関しては、互助精神である「クモの巣」の物語を信じた。キムは身代わりとなったラザの意図を咄嗟に察知して、彼の嘘をそのまま肯定する。その時、彼は「クモの影同様、クモも見た」（364）と思った。

「原爆、故郷喪失、波止場での射殺、防弾服を着なかったための死」を個人的な不運だと解釈するラザに対して、ヒロコはそれらすべてを避けることができた「人間の行為」（Kiczkouski 132）だと考え、その背後に強力なナショナリズムの力が働いていることを見抜いている。キムは三世代の親密な繋がりのあるラザを信じたが、アブドゥラーを信じなかった。キムの言い分は、9/11 同時多発テロや父殺害を実行したのは、仏教徒でもユダヤ教徒でもカトリック教徒でもなくイスラム教徒であり、従ってイスラム教徒は理解できないよそ者（他者）だということである。イスラム教徒をテロリストだと一括りにしてしまう無茶な論理の根底には、ナカチが指摘するように、キムのイスラム嫌悪が存在する（Nakachi）。それはアメリカの「異民族嫌悪」と根は同じである。ヒロコが問い質したのはその点、つまり何故キムが警察に通報したのかということである。

キムの裏切りによって、ヒロコは長年抱いてきた疑問――「なぜ二度目の原爆を落としたのか」（100）――に対する答えをようやく見つけることになった[8]。

You just have to put them in a little corner of **the big picture**. In **the big picture** of the Second World War, what was seventy-five thousand more Japanese dead? **Acceptable**, that's what it was. In **the big picture** of threats to America, what is one Afghan? **Expendable.** Maybe he's guilty, maybe not. Why risk it? Kim, you are the kindest, most generous woman I know. But right now because of you, I understand for the first time how nations can applaud when their governments drop a second nuclear bomb. (370. 強調は筆者)

「ビッグ・ピクチャー」とは国の利益を守るというナショナリズムであり、国防という国家レベルの政策においては異民族の人間性を否定しなければならない。最初の原爆が十分過ぎる被害を与えたことは、当然周知していたはずだ。しかし自国アメリカを異民族の脅威から守るために二度目の原爆を投下し、犠牲者がさらに７万５千人増えたところで、それは「許容できる」ことなのだ。対テロ政策においても同じく、イスラム教徒によるテロの脅威から国を守るためなら、無実のアフガンを一人「犠牲にしてもよい」のだ。その論理に沿った行動をしたキムにヒロコは長崎に原爆投下を認めたトルーマン大統領の姿を重ねるのである（369）。ヒロコの批判の矛先は異民族を嫌悪･恐怖する国の政策ではあるが、それに疑問を持たずに同調する国民キムにも向けられている [9]。キムはアメリカ人であることを優先した。長崎へ二度目の原爆を投下したとき米国民は称賛した。同様に、逮捕されたラザが CIA に追われている容疑者だと分かったとき、カナダ警察は「お父上もあなたを誇りに思うでしょう」（370）と言うのである。

とはいえ、クモの巣の絆は完全に途切れてしまったわけではない。それは、アブドゥラーが故郷にもどる手助けをするヒロコとラザに確認できる。ヒロコが経験するさまざまな国際的出来事（原爆、印パ分離、ソ連のアフガン侵攻、印パ核実験、対テロ戦争）は、異国/異民族を敵とし自国/自民族を守ることを正当化してきた。しかし、戦時中の偏狭なナショナリズムに抵抗した父のように、ヒロコもまた国家を妄信することはなかった。二家族の間で続いてきた情緒的絆は、そもそも国籍を超えたトランスナショナルな絆だった。しかしそれですら内部と外部を作り上げてしまう。『焦げついた影』における家族を超えたいわば「トランスファミリアル」な絆は、異国人を「怪しい」よそ者として嫌悪/排除する国家や無批判な同調者への抵抗力となりえることが示唆されている。

注

1. グアンタナモ収容所でアメリカ軍が被拘禁者に対し人権を侵害するような虐待が行われていたという赤十字国際委員会の報告書が、2004 年 11 月にニューヨーク・タイムズによってリークされた（“Red Cross Finds Detainee Abuse in Guantánamo”）。

2. 1935 年、ナチス・ドイツの親衛隊トップのハインリッヒ・ヒムラー（Heinrich Luitpold Himmler）は、ドイツ民族の人口増加と純血性を確保するために女性の福祉施設レーベンスボルン

（Lebensborn）を設立した。

3. Hazara.　アフガニスタン中央部の山岳地帯、イランとパキスタンに一部に住むモンゴル系民族。

4. 彼がアメリカ人として「パッシング」（passing）できたのは、ヨーロッパ系白人という民族性のためであることは言うまでもない。パッシングとは人種、階級、性、性的志向など自分とは違ったアイデンティティ・グループの一員として認められる能力。

5. Mimicry.　Homi Bhabha, 85-92.

6. キムはジャケットのポケットにバラのドライ・フラワーを見つけているので、ラザは作品外ではジャケットを着用していたことは推測できる（332）。

7. Bomber jacket.　第二次世界大戦中にアメリカの爆撃機隊員が着用した上着をモデルしたもの。袖と腰が伸縮性のある革製の短いジャンパー。

8. シャムシーはハミルトン大学の学部生の頃に聞いた講義によって原爆に関心を持ったと語っている。そのとき「広島の原爆を正当化する人でも、3 日後の長崎への原爆はどのように正当化するのか」というある学生の発言が心に残ったと語っている（中地 26）。ちなみに、広島に投下されたのはウラニウム爆弾だが、長崎にはマンハッタン計画のプルトニウム爆弾が用いられた。その意味でプルトニウム原爆は長崎で初めて使用されたということである（Sullivan 181）。

9. シャムシーはインタヴューで「合法的政府によって実行され、民衆の支持を受けた行為による人的被害に関心がある」と語っている（Interviewed by Filgate）。

使用文献

Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. Routledge, 1994.

Kiczkowski, Adriana. “Glocalization” in Post-9/11 Literature. *Burnt Shadows* by Kamila Shamsie,” *Journal of English Studies*, vol.14, 2016, pp.125-136.

Nakachi, Sachi. “Why a Second Bomb?: Kamila Shamsie’s Challenge to American Xenophobia in *Burnt Shadows*,” *Contemporary Literature Criticism*, vol. 432, pp. 277-281. Originally published in *Journal of Ethnic American Literature*, vol. 2, 2012, pp. 132-141.

中地幸「パキスタン系作家 Kamila Shamsie の *Burnt Shadows* における移動する主体と傷の共有」『AALA』17、2011、pp.22-31.

O’Loughlin, Liam. “Disaster Cosmopolitanism: Imaginations of Comparison in Kamila Shamsie’s *Burnt Shadows*.” *Negative Cosmopolitanism: Cultures and Politics of World Citizenship after Globalization,* edited by Eddy Kent and Terri Tomsky, McGill-Queen’s University Press, 2017, pp. 91-104, 310-313.

Sullivan, Kathleen. “Nagasaki Re-Imagined: The last shall be first.” *Critical Military Studies*, vol.1, no.2, 2015, pp. 181-183.

Shamsie, Kamila. *Burnt Shadows*, Picador, 2009.

---------. “The Kamila Shamsie Interview.” Interviewed by Michele Filgate, September 12, 2011.

Vitolo, Daniela. “The Performance of Identity in Kamila Shamsie’s *Burnt Shadows,*” *Transnational Literature*, vol. 8-2, pp.1-7.